

## 第一話 ちよつと不思議なエロ空間

俺のあくびにつられて他の2人も小さくあくびをする。

時間はまだ午後の4時。8畳のワンルームにベランダから差し込む日差しは、少しだけ赤みを帯びていた。

「暇だなあ」

「暇だねえ」

俺のつぶやきに春歌が同じ反応をする。

Tシャツにショートパンツという、露出の多い格好で幼馴染の春歌は床の上に寝転がっていた。少し茶色がかったショートカットの髪は脱色しているわけではなく、昔からの地毛だ。はつらつとした明るい性格とその見た目から、大学でも有名な可愛い系美女である。

「ねえ、なー君。新しいゲームとかないの？」

俺を『なー君』と呼び、テレビ台の引き出しを開けながら聞いてくるのはもうひとりの幼馴染、冬乃。

こちらは涼しげな白のワンピースを着ている黒髪ロングの清楚系美人だ。その美人は今、四つん這いになって魅惑的なお尻をこっちに向けている。ワンピースの生地が妙に扇情的な曲線を描いて俺の下半身を刺激した。春歌と比べれば2サイズは大きいという巨大な胸が重力にひかれてたわわに揺れている。

「今あるやつはずいぶんやり込んだしなあ？ 来月にグローバルファイトの新作が出れば楽しめそうだけど」

じゃあさ、と春歌が俺を突つつく。

「面白い動画とかは？ 夏樹ってそういうの好きでしょ？」

「そんなのあらかた見ちまったっての。一昨日見せた動画が最新のとっておきだったんだよ」

「漫画は？」

「ここにあるのは全部読んだじゃんか」

「麻雀とか」

「今朝までずっとやってただろ」

「トランプ」

「びみょー」

春歌が次々に案を挙げるがどれも興味がわからない。

「暇だねえ」

「ああ、暇だな」

嘆くように春歌と俺がつぶやきあう。

そこへ俺のとなりに座り込んだ冬乃がにっこりと笑って寄りかかってくる。

「じゃあ……エッチでもする？」

何の気なしにといった感じで口にした冬乃へ俺もあっさりと答えた。

「そうだな」

じゃあ早速ということ、冬乃がベッドの上に移動する。追っかけて俺がベッドに上がった時、冬乃はもうすでにワンピースを大胆に脱ぎ捨てているところだった。

俺も遅れじと上下を脱ぎ、トランクスも脱いで放り投げる。

「ちよつと、こっちに投げないでよ」

運悪くトランクスを頭にのせる事となった春歌から抗議の声があがるが、俺はそれに「悪い悪い」と軽く謝って冬乃に視線を戻した。

冬乃は今まさに自分のブラに手をかけているところだった。その手がブラを外すと、拘束具から放たれた巨大なおっぱいがぷるんと現れた。日に焼けていない白い乳房が俺の目を釘付けにする。

おっぱいおっぱい、でっかいおっぱい、きよだいなおっぱい♪

「ちよっと、なー君。そんなにじっと見られたら恥ずかしいよ」

「これからもっと恥ずかしいことするんだから、見られるくらい大したことじゃないだろ？」

ハハハ、何をそんなに照れる必要があるんだ。

「それとこれとは別なんだけどなあ……」

ぼやきながら冬乃がはいていた下着も脱いで、生まれたままの姿をさらす。げに美しきは裸体の幼なじみなり。こうまで扇情的な体に成長するのは、お子ちゃまだった昔の俺は予想だにできなかったよ。

待ちきれなくなった俺は、布一枚身につけていないまっさらの姿になった冬乃へ手を伸ばし強引に抱き寄せた。

「あっ」

冬乃の体が俺の腕に収まる。ついでに巨乳が押しつけられて、腕にぽよんぽよんの感触が伝わってきた。

その豊かに育ったおっぱいをまずは片手でゆっくり揉むと、冬乃の口からつややかな声が漏れる。なでるように乳房を揉んだ後、今度は口を寄せて固くなった乳首を唇でつまんだ。

「やんっ♪」

冬乃が身をよじるが、それを妨げるように俺は大きく口を開いておっぱいに吸い付く。同時に手を冬乃の股間へと持って行き、すでに濡れはじめている秘部を指でなぞった。

「んんっ」

くぐもった声をこぼしながらも冬乃は俺の与える快感を受け入れる。

ちゃぷちゃぷと音を立て始めた膣口に指を差し込み、内側をなでるように愛撫すると、冬乃の吐息が熱くなっ

ていった。

「はあ……んっ……やだ、気持ち良い……」

普段優等生然とした冬乃だが、この部屋で裸になってしまえば途端にエロティック満載の妖艶な姿を見せる。しかし快感に溺れるその姿を見ることができるのは俺だけの特権だ。

——にゅぷ……じゅぷ……にゅぷっ

おまんこへ差し込む指を2本、3本と増やし、その動きを速めていくのにあわせて冬乃の声も大きさを増していく。

「んっ、んんっ……、そこっ……もっと……」

「そろそろ良いか、冬乃？」

我慢しきれず、準備もそこそこに冬乃へ言葉をかける。

「……良いよ。おちんちん、私のおまんこに入りたいんだよね？」

「そうだ。冬乃のびしょびしょに濡れたエッチなおまんこに、俺のチンポを入れて思いつきり動かしたい」

性欲をかき立てる言葉のキャッチボールもお手のもの。互いに卑猥なワードを投げかけながら、気分を高めていく。

「うん、来て……」

冬乃をベッドに寝かせるとその上に覆い被さり、受け入れ準備万端のおまんこへ正常位でチンポを挿入する。

——じゅぷぷっ……ずりゅ

艶やかに光る膣口が俺のチンポをぬるりと啜え込んだ。途端にチンポが膣壁に囲まれて快感を享受した。何度味わってもすごい快感だ。チンポを起点にして全身が幸福感に包まれる。

このままでも十分気持ち良いが、当然俺の本能はさらなる刺激を求めて腰を動かせと急かしてきた。

ーズッ、ズッ、ズッ、ズッ

冬乃の中を固くなった息子が前後に行き来し、そのリズムに乗って妖艶な声が紡ぎ出される。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

ときおり腰をグラインドさせながら強弱や角度の変化を付けつつ、なめらかに動くチンポが次第にそのペースを上げていく。

「なー君っ、私のおまんこ、気持ち良い？ あんっ、おちんちん、気持ち良く、できてる？」

冬乃が健気な事を口にするが、たぶん半分は自分がエッチな言葉を口にして興奮するためだろう。

いや、こっちも興奮するから何の文句もありはしない。当然その誘いに俺も乗ってやる。

「ああ。しっとり温かくて、中のヒダヒダがチンポを包むようにまとわりついてくる。冬乃のおまんこは最高にエッチで最高に気持ち良いぞ」

「気持ち良いよっ、なー君。おまんこ気持ち良くて、変になっちゃいそう！ あんっ、あんっ、あんっ！」

次第に高まっていく俺と冬乃。その高まりが体の一点に集約され、やがて睾丸からせり上がってくる快感へとつながっていく。

そろそろ射精が近いことを知った俺は、腰を振るスピードをそのままに冬乃へ告げる。

「イクぞっ。中で良いよな？」

「中で出したいんだよね？ 良いよ！ 私のエッチな、おまんこにつ！ なー君の、おちんちんから出てくる、ドロドロの精液っ、いっぱい出して！」

「思いつきりぶちまけてやるぞ！」

俺もそう宣言してラストスパートに入る。腰の動きを速めてさらなる快感をチンポにもたらした。

「あっあっあっあっあっ、イクっ、イっちゃう！」

冬乃の体がピクンとはねる。膣の中でチンポにまとわりついていた膣壁がうねるように脈動した。

「うっ」

——どびゅ、どびゅびゅびゅ、どびゅう

絶頂に達する冬乃の膣に向けて、俺も欲望の白濁液を解き放つ。竿の中を流れた精液が鈴口の先から解放され、冬乃の膣へと染み渡っていく。

どくんどくと何度かチンポが収縮するような動きを見せ、残っていた精液を押し出すように膣へ送り込んだ。「はあ……はあ……はあ……はあ……」

——ちゅぽん

冬乃の体からチンポを抜き取ると、しばらくしてヒクヒクと動く膣口から俺の精液が流れ出てくる。冬乃自身は脱力してベッドに横たわり、目を閉じて息を切らしていた。

一発やって賢者タイムに移行した俺は、ベッドの上から視線を横に向ける。そこには俺と冬乃の情事などどこ吹く風でテレビを見ている春歌の姿があった。

そんな彼女へ俺は対戦ゲームへ誘うような軽い口調で声をかける。

「春歌もやるか？」

「ついでみたいな言い方しないでよ」

何をやるかなんて事は春歌も聞き返してはこない。互いにわかりきっている事だからだ。

加えて言うと、春歌の口から発せられたのは拒絶の言葉じゃない。つまり誘った事自体、そして誘った意味自体に否定的ではないということだ。

「ついでなんかじゃないって。俺は春歌が相手だからこそセックスしたいと思うんだし」

春歌が相手、の部分強調して真っ正直に自分の思いを口にした俺へ、春歌は複雑な表情を見せながらも口を

開いた。

「……しようがないわね」

それはつまり、俺とのセックスを受け入れるという意味である。

承諾が得られた俺は早速ベッドを降りて春歌に近づき、座っている彼女の服へ手をかける。子供へするように万歳させるとTシャツを脱がせ、ショートパンツのボタンを外してチャックを下ろし、ゆっくりと脱がせる。

あつという間に下着姿となった春歌は抵抗のそぶりを全く見せない。ブラのホックを外して脱がせると、彫刻のように形が整った美しい乳房があらわになった。

「いつ見てもきれいなおっぱいだな」

「馬鹿」

俺を罵りながらも春歌は胸を隠そうとしない。もう何十回と見られているから今さらと思っているのかもしれないが、俺としてはもう少し恥じらいを見せてもらっても良いんじゃないかと思ってしまう。贅沢な願いだろうか？

無抵抗なのを良い事に、俺はツンと張りのあるふたつのおっぱいへ両手を伸ばす。さっきまでその双丘を包んでいたブラの代わりに俺の手で包むと、まるでサイズを計測したかのようにジャストフィットした。

「うーん、俺の手にぴったりサイズ」

吸い付くような肌触りのおっぱいを軽く揉むと、俺の言葉のチョイスが悪かったのか、春歌が機嫌を悪くする。「悪かったわね。ノンみたいに大きくなってくつて」

ノンというのは春歌が冬乃につけたあだ名である。

どうやら春歌としては幼なじみの冬乃に対して、胸の大きさのコンプレックスがあるらしい。俺に言わせれば劣等感を感じる点など何一つ無いのだが……。

確かに大きさだけなら冬乃に軍配が上がる。だがおっぱいの魅力は何も大きさだけではない。春歌のおっぱいだって、張り、艶、形、と冬乃のおっぱいよりも優れた点をたくさん持っているのだ。

「大きくなっても春歌のおっぱいは極上にエロいぞ」

「これ、喜ぶところなの？」

俺が万感の思いを込めた賞賛の言葉は、春歌の琴線にかすりもしなかったらしい。

困惑するような、呆れるような表情を浮かべる春歌だが、今の俺に必要なのは彼女の同意では無く極上の快感をもたらしてくれる濡れ濡れおまんこである。

何はともあれ準備をしなくてはと、おっぱいから片手を離して春歌の股間へと持って行き、下着の中へと即座に滑り込ませた。

「んっ」

春歌のくぐもった声を開始の合図にして、俺の指が秘部を愛撫し始める。

「ふ……うっ、んっ」

俺の手の動きに反応して、春歌のおまんこが湿り気を帯びだす。

―ぴちゃ、ぴちゃ、くちや、ぷにゅ、くちや

テレビの音に紛れて愛液の出すエツちな音がかすかに聞こえてくる。

「んっ……はあ……夏樹……夏樹い」

俺の名を呼びながら頬を赤く染め、恍惚とした表情を浮かべる春歌は、そのまま形の良いおっぱいを俺に押しつけて抱きついてきた。しっかりスイッチが入ったようだ。

抱きついた格好のまま、俺は春歌の秘部をさらに刺激する。密着してしまったため、おっぱいを揉む事はできないが、素肌に直接あたる乳房のやわらかさと固くなった乳首の感触はバツチリ伝わってきている。

最初はゆっくりだった指の動きを次第に速めていく。助走をつけて勢いを増す陸上選手のように、ペースを上げて春歌おまんこに一層の快感を塗り込んでいった。

「もっとお……もっとしてえ」

普段はつれない態度の多い春歌だが、エッチの最中だけは態度が変わって甘えてくる。セックス時の甘えんぼ春歌を引き出せるのは俺だけの特権だろう。

「立って、壁に手をつけて」

俺に抱きついていた春歌を引き剥がし、そう指示をして立たせる。黙って俺の言うなりになった春歌が壁に手をつくときれいな小ぶりのお尻が丸見えになった。するりと下着を下ろして脱がせると、両足の付け根、その合間からチラリと盛り上がったマン土手が見える。

「もっと低い位置に手をつけて、お尻をこっちへ突き出して。そう、足はもう少し開いて」

言われるがまま春歌がお尻を突き出して足を開いた。床と両足で作られた二等辺三角形の形がエロ美しい。その頂点ではマン土手が完全にあらわとなり、大陰唇とその真ん中を淫靡な割れ目が一直線に通っている。割れ目を中心に愛液が濡れて光り、そこからこぼれ落ちたしずくがひとつ、糸を引いて床に落ちていった。

俺は春歌のおまんこにあわせてかがみ込み、目の前に来た大陰唇を指で開くと舌を伸ばす。

——ぺろっ

「ひゃう」

俺の舌が春歌のおまんこをひと舐めすると、その口から悲鳴のような声が上がった。

——ぴちゃ、ぴちゃ……、れろれろ……

春歌の反応などお構いなしに舌を這わせる。小陰唇を一通り舐めた後、膣口へ舌先を侵入させ、指先でその周囲を愛撫した。

「んあっ……、んんっ、んっ……はあ……ん」

吐息のような声が春歌の口からもれる。

「やだ……そこ良い……、気持ち良いよお夏樹い……」

完全にスイッチの入った春歌は股間からもたらされる快樂に溺れている。自分から腰を振っていることに、本人は気付いているのかいないのか……。

「もっとお……もっとしてえ」

「舐めるだけで良いのか？」

「それだけじゃイヤあ」

「じゃあ、どうして欲しい？」

おねだりする春歌にちよつとだけ意地悪をする。

俺が望む展開も春歌が望んでいるものも、お互いに言わずとも分かりきっているが、それでもあえて口にしてもらおう。

「入れてえ」

「何を入れて欲しいのか、ちゃんと言わなきゃだめだろ」

入れての一言だけでも結構な破壊力はあるが、まだまだこんなもんじゃない。春歌はもつとできる子のはず。そう思っただけでも催促すると、春歌はあっさりと乙女が言っただけなら言葉を口にした。

「おチンポ……。夏樹のおチンポが欲しいのお。おチンポ入れてぐりぐりして欲しいのお」

ぐりぐり、つて……あれ？俺の思ったのとは違う答えが返ってきた。春歌的にはチンポ入れられてぐりぐりと回される方が気持ち良いのか？

「ぐりぐりなの？ トントンとかバンバンとかはいらないの？」

「トントンもして欲しい……。いっぱいして欲しいのお」

どうやら合意が取れたようだ。ぐりぐりだけじゃないなら俺としても文句はない。

「素直な春歌は好きだよ。じゃあ、ご待望のチンポを入れてあげるから、お尻をもっと突き出して」  
早速この体勢のままチンポを突き入れようと思ったのだが……。

「後ろからじゃやだあ。ギョってできないのやだもん」

と、そんな言葉でバック挿入は嫌がられてしまった。まあ、別にどうしても後背位でいたいわけじゃないし、良いけど。……さて、どうしようか？

んー、あれでいくか。

「じゃあ春歌、こっちにおいで」

俺は春歌の手を取って壁から離れると、カーペットの上にあぐらをかいて座る。

「ほら、おいで」

そう言いながら両手を開いて待ち受けると、言わんとするところを察した春歌が俺に抱きついてくる。

「座る位置は……わかるだろ？」

「うん……」

春歌は俺に抱きついたまま腰をゆっくりと下ろしていく。俺も自分の男根を手で固定して、春歌のおまんこが着地してくるのを今か今かと待ち受けた。

春歌のお尻が俺の腰へと降りてきて衝突する瞬間、にゆるんとチンポが急激な圧力に包まれる。若干の抵抗を感じながらも膣の中へと迎え入れられたチンポは、相変わらずキツキツの春歌おまんこを貫いた。

「ふっ……ああ……。おチンポ入ってきたあ」

俺の耳元で春歌のエロボイスがささやく。

「動くぞ」

宣言するやいなや、俺は座ったまま腰を突き上げる。春歌の膣はチンポを絞め殺さんばかりの圧力を加えてくが、クンニでしっかりと愛液が染み出ていたおかげでなんとか動かさせた。

「きゃっ……あっ」

驚いた春歌が短く悲鳴を上げるが、その声もすぐに嬌声へと変わっていく。

「あんっ、あんっ、あんっ、あんっ」

俺が体の全体を使って春歌の軽い体を宙に浮かせると、一度跳ね上げられた彼女の体は重力に引っ張られて落下してくる。地球の重力を味方に付けたその勢いは、俺が頑張って腰を振るよりも強い。いつも以上にチンポはおまんこの奥へ達し、先端に子宮らしき感触が当たった。

「深っ……、奥っ……突いてるよお」

春歌もそれがわかるようで、悩ましげな声で俺に伝えてくる。

たまに突き上げるのを止めて、腰をぐるぐると回転させながらおまんこの中を刺激すると、春歌の声がさらに



艶めかしくなった。

「んああ……、良いの……、ん……」

一息ついた後は再びピストンタイムだ。スローセックスから一転して激しいピストン運動へと変化させる。

——ズンツ、ズンツ、ズンツ、ズンツ、ズンツ

調子に乗って突きまくっている俺の肩に手をのせ、上下に激しく春歌が跳ね上がる。そのおっぱいはちょうど俺の目線の高さで上下にブルンブルンと揺れていた。揺れても美乳とは、春歌恐るべし。

「あんっ、んうっ、あんっ……」

揺れる春歌のおっぱいを眺めながら激しく腰を突き上げる。

ときおり釣り餌のようにぶら下げられたおっぱいを舐めつつ、春歌の小さなお尻をがちりとホールドしてピストン運動を続けているのだが……思った以上にしんどいな、これ。

「おまんこ気持ち良い、夏樹のおチンポ、気持ち良いのお！」

春歌の方はすっかり快感の沼にハマっているようだが、こっちは軽いとはいえ人ひとりの体を延々と持ち上げているのだ。この体位、見た目よりもずっとキツイ。

これはまずいと思った俺は、すぐさま座位を放棄。春歌を抱きしめたまま押し倒すと、床の上で無理矢理正常位に体位を変更する。

「春歌、もうイキそうか？」

「もうだめえ、気持ち良すぎていつちゃうの……！ 夏樹のおチンポでいかされちゃうう！」

もう猶予は無い。俺はこれまでの遅れを挽回すべく、腰を全力で振って自分の快感だけを追い求めた。

——パン、パン、パン、パン、パン、パン！

もはやこの瞬間だけを見れば、春歌という生きたオナホールを使って自慰にふけるサルみたいな状態だ。

その甲斐もあってなんとか俺の方もイケそうだ。背中を快感がせり上がってくる。

「あっ、あっ、あっ！ イクぅ、イクぅうううう！」

とうとう春歌が絶頂に達し、体を震わせた。その両足が俺の腰に回され、離してなるものかどがちり固定する。

それに遅れる事5ピストン、追っかけで俺も春歌の膣内へと射精する。生出しされた精子はすぐさま四方へ拡散し、春歌のおまんこ内を遠慮なく縦横無尽に泳ぎ回った。

ふああ……最高の気分だ。

この女を俺のものにしてやったというなんともいえない征服感、そしてメスを孕ませるチャンスを活かし切ったというオスとしての充足感が俺を包む。

「はあ……はあ……はあ……」

互いに息を切らしながら裸のまま抱きしめ合い、そのまま床に寝転がる。

再び訪れた賢者タイムに、俺は部屋の天井を眺めながら大きく息をついた。

短時間に清楚系美人と可愛い系美女の2人とセックスし、欲望のままに生まんこへ中出しするという男にとって夢のような状況。

別に俺は春歌や冬乃と付き合っているわけじゃないし、セフレというわけでもない。たぶんこの部屋以外の場所できつきみみたいなエロワードを投げかければ平手のひとつくらいは食らうだろうし、胸を揉みしだこうもんなら当分口もきいてもらえなくなるだろう。

だけどこの部屋の中でだけは話が別だ。一体どういうわけなのか頭の悪い俺にはさっぱりわからんが、この部屋の中では不思議と2人の貞操観念がガバガバになる。恋人でもない俺が生で挿入しようが中出ししようが「し

ようがないなあ」で済んでしまうのだ。

正直いまだに意味が分からん。だけどそれで何か問題があるのかと言えば、少なくとも俺に不都合は無いんだよな。この部屋にいる限り、お金も面倒くさい手順もすつとぼして俺の性欲は満たさるわけだから。

やたらと広いバスルームのある8畳一間のワンルーム。広さ29平方メートルの部屋にだけ許されたこの特殊なエロ空間の事は俺と彼女たち3人だけの秘密。これが普通じゃない事はわかっている。でも誰ひとりその原因を説明するつもりもなければ、この部屋から遠ざかろうともしない。毎日のようにこの部屋へ集まり、適当に飲み食いし、自堕落に遊んで、思い出したようにエッチする。

俺たちにとって、ここはこの上なく都合の良い【性域】だった。